

松下幸之助記念志財団 研究助成
研究報告

(MS Word)

【氏名】 関野文子

【所属】 (助成決定時)

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

【研究題目】

開発プロジェクトにおける新たな住民の主体性と組織化のあり方の創造

【研究の目的】 (400字程度)

本研究の目的は、住民参加型の開発プロジェクトと地域住民の間に生じる、主体性や組織化に関する齟齬を明らかにすること、住民とプロジェクト関係者が協働して共通目標に向かうための、新たな主体性のあり方や組織化のあり方を創造し、プロジェクトに反映することである。

カメルーン東南部に暮らす狩猟採集民バカは長年にわたり森での遊動的な狩猟採集生活を送ってきたが、近年、定住化や国立の設置に伴う野生動物の狩猟の禁止によって、従来の生活は大きく変化している。1960年代から現在まで、国内外のNGOによってバカを対象とする環境、経済、教育関連のプロジェクトが実施されてきた。近年のプロジェクトにおいては、伝統的なバカの行動・生活様式が重視される傾向もあるが、バカはプロジェクトへの参加に消極的であることや、集団的な意思決定に不慣れであることからエンパワーメントが必要であるとも指摘されている。本研究では、開発プロジェクトとバカ自身の双方が互いにとって有意義な結果を引き出すための、プロジェクト側と住民側のコミュニケーションや意思決定の方法の差異を認識し、その差異を乗り越えるための方策について示唆している。

【研究の内容・方法】 (800字程度)

本研究では、第一に、開発の文脈とは異なる日常生活におけるバカの意思決定や平等性について明らかにするため、食物分配に関する分析をおこなった。食物分配に関しては、食物分配を行うペアの親族関係の分析、分配に伴う相互のやりとりについて分析をした。その結果、あたえ手ともらい手の関係は、近親間の助け合いだけでは説明ができず、親族関係にかかわりなく分配しているペアが多いことがわかった。また、分配をする・受ける際には、料理を分ける時には周囲の者が立ち去るなどの相手に圧力を与えないための相互行為があることがわかった。さらに、分配では、目の前にある食物の非対称性を解消するというモチベーションが働いていることが分かった。以上から、食物分配における「平等性」とは、その場その場での相互行為をとおして一時的、局所的に生じた分配場の内部で達成される「平等性」であることが明らかになった。

第二に、当該地域における開発プロジェクトや住民組織に関する分析を行った。まず、各村で実施されてきた開発プロジェクトのリスト化と文献情報、地域のバカの聞き取りにより、プロジェクトの評価や課題を明らかにした。バカの集落6村での調査の結果、当該地域では、農業支援などのプロジェクトが多く実施されていることがわかった。具体的には農具の配布といった物資の支援や、開墾のための住民組織づくりなどの活動が実施されていた。住民組織に関しては、比較的町に近く、若者の識字率や教育レベルの高い地域では、NGOの働きかけをきっかけに、農耕民とバカの共同の組織が形成されていた。例えば、開墾作業をグループで行うなどの活動がおこなわれており、バカも主体的に関わりながら順調に活動していた。一方、他の村落では、プロジェクトを主導するリーダー的な人物が生まれなかったことから、組織化や共同農地が放棄され、失敗に終わっていることも明らかになった。次に、バカがメンバーとして含まれる住民組織について分析をした。バカのNGO組織の幹部関係者に聞き取りをした結果、同じバカであっても、プ

プロジェクト側と村人の間にコミュニケーションの課題があることがわかった。例えば、プロジェクト側は生産物を回収して、種子を他の村落に普及させるという意図をもっていても、村人はそれを理解していないため、村人は単にNGOから搾取されていると認識していることもあった。

【結論・考察】（400字程度）

本研究では、開発プロジェクトにおける新たな住民の主体性と組織化のあり方を明らかにするため、食物分配を通じたバカ日常的なコミュニケーションのあり方と、開発プロジェクトの実態や住民組織についての分析を進めてきた。その結果、バカの日常生活においては、相手に直接にかを要求することはなく、相手の自発性を引き出すような振る舞いが重視されること、相手との非対称な関係はその時々で解消されることが望まれることがわかった。しかしながら、開発プロジェクトや住民組織においては、むしろ伝統的なバカのコミュニケーション様式から脱している教育レベルが高く、職歴のあるエリート的なバカが主体となっており、他のバカとの認識のズレや課題が再生産されている場合があることが明らかになった。また、農業支援においては、NGOからのリターンが不明瞭であるため、村人は不平等な関係が長く続いていると認識しており、NGOへの不信感を抱いていることが明らかになった。以上から、バカ社会における意思決定などのローカルな実践やシステムと、外部からもたらされた組織制度は伝統か開発かといった二項対立で語れるものではなく、混ざり合い、多様な形で共存していた。したがって、プロジェクト側や主導者はその認識のズレの要因を認識するとともに従来のアプローチに留まらない対話の積み重ねと試行をする必要があることがわかった。